

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
 昭和五十九年 四月十五日 発行 (毎月一回・十五日発行)

(通第四一七号)

慈

光

第三十六卷 第四号

目

同朋観念と秩序精神	近角常観	(1)
① 九十を越えて	柳瀬留治	(6)
② 一道会の記(二)	榊原徳草	(8)
「念仏詩抄」より	木村無相	(11)
木村無相『法談』	福井新聞	(13)
慈光日誌抄	西元宗助	(20)
仏徳の讃仰	花田正夫	(23)

次

63.7.22 63.9.22

同朋觀念と秩序精神

近角常觀

四海同朋といへば、平等主義、平民主義、世界主義といふ觀念を与えて、何となく秩序的の精神、統一的思想の欠けたる如く考へらるる傾向がある。

上下の秩序といへば、嚴格、服従、律法主義に考へられて、何となく平和、共同、親愛の潤いが欠けて居るかの感を抱かしめるおそれがある。

前者は悪平等にして、後者は悪差別である。前者はや、もすれば秩序を破壊するの弊を生じ、後者は律法圧迫の害を来し易きものである。思想上の左傾右傾の如きは、確かにこの如き不徹底に陥るを免がれないものである。

然らば如何にして同朋觀念と秩序精神と完全なる調和を見出すかというに、徹底したる絶対の信仰より生じ来るものである。たとえ宗教といへども、不徹底なる相対的の信仰なれば、やはり兎角いづれかに偏重すること、右傾左傾思想と同様である。

聖徳太子は篤敬三宝の絶対的の信仰を以て、四生の終歸、

如来の權化として崇敬する、絶対の師弟秩序を生ずるに至つたというは、確かに同朋觀念と秩序精神の円満なる調和を、事実に物語るものである。

蓮如上人曰く、「故聖人の仰せには、親鸞は弟子一人も持たずとこそ仰せられ候ひつれ、その故は、如来の教法を十方衆生に説き聞かしむるときは、ただ如来の御代官をまふしつるばかりなり、さらに親鸞めづらしき法をひろめず、如来の教法をわれも信じ、人にも教へきかしむるばかりなり、その外は何を教へて弟子と云はんぞと仰せられつるなり、さればとも同行なるべきものなり。これによりて聖人は御同朋御同行とこそかしづきて仰せられけり。」

如何にも一点私なき聖人の信仰である。我説くところは如来の教法である。聞かしむる人々は十方衆生である。親鸞の教に何等特徴新奇なるものはない、自信のまゝを教人信するものである。「わがはからひにて人に念仏をまふさせ候はばこそ弟子にても候はめ、ひとへに弥陀の御催しにあらずかりて念仏申す人を、わが弟子と申すこと、きはめたる荒涼のことなり、皆如来の御弟子なり、同じく是れ御同朋なり、御同行なり」というが、親鸞聖人の同朋觀念と謂つべきである。

以上は聖人の同朋に対する態度である。此の如き態度を以て、教化を蒙りたる門弟は、亦絶対的の信頼を以て聖人を

万国の極宗となし、所謂四海兄弟、三宝歸命の世界的平等的の信仰を徹底したまうたのである。「何れの世、何れの人か、此法を貴ばざらん」時に古今の別なく、処に東西の差なく、貧富、善悪、何れも救済せざるはない。故に如何なる悪人なるものも、能く教うればこれに従順ならしむることが出来る。絶対無限の大慈悲によらずんば、世の枉れるものを直うすることは出来ぬ。

此の如き絶対救済を徹底せしめられ、ば、普天の下、率土の濱、如何なる民衆といへども中心悦服して、君天、臣地の大義仰がざるものはない。君徳天の如く覆い、臣道地の如く載す。群郷百僚礼を以て奉とし、訴訟明かに辨じて貧民由る所を得る次第である。

此の如き聖徳太子の徹底したる信仰を最も直載簡明に闡明されたるは、親鸞聖人の四海兄弟、同一念仏の一道である。親鸞は弟子一人も持たずと告白されたる御同朋、御同行の態度で教化されながら、今日にいたるまで聖人を以て

崇めることになる。聖人が最も己を外にして一点の私なく、如来の下部として御代官といわれたる言葉は、門弟より見れば、直ちに是れ如来の代理、仏陀の御使と信順するのである。何等の特徴なく、一点の私なきは、かえつて是れ聖人が如来の教法に純一無雜、何等加うるることなき諸仏の直説となるのである。

殊に聖人臨末に際し、某閉眼せば賀茂河に入れて魚に与うべし、と遺言された聖人の墳墓を慕うて集りたるものが、即ち今日日本願寺宗門の起源をなしたのである。而して遂に伝灯相承の師弟秩序を生じ来つた次第である。

然るに或者は聖人の御同朋御同行といえる態度をそのままに鸚鵡返しに、同朋主義等と吹聴して悪平等主義に陥り、宗門を以て宗團主義に理解して、あたかも門末の共和主義以上の僻見に陥る危険に瀕した次第である。畢竟これ世の左傾思想を宗門の上に、誤り用いられたる結果である。

門弟が聖人に対して絶対信順の態度を取りたるは、全く聖人が法然上人に対して真の知識、本師聖人として絶対的信順されたる態度の生写しである。「たとひ法然上人にすかされまらせて、念仏して地獄に墮ちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」という態度は、実に類例を見出すことの出来ない絶対信順の態度である。

法然上人が愚痴の法然房、十悪の法然房と申されれば

とて、聖人は法然上人も愚痴、十悪、親鸞も愚痴、十悪、とは申されぬ。「愚禿鈔」の題号の下には、聖人が本師信順の態度が示されてある。曰く「賢者の信を聞いて、愚禿が心を頭はず。賢者の信は内は賢にして外は愚なり。愚禿が心は内は愚にして外は賢なり」と。是れ実に師弟信順の秩序を建現する根本信念である。

親鸞聖人の兄弟子、聖覚法印が法然上人を讃歎せられたる銘文を、親鸞聖人がそのまま和讃に作られたのが、有名になつてゐる。「無明長夜の灯炬なり、智眼くらしと悲しむな、生死大海の船筏なり、罪障重しと歎かざれ。如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳も、骨をくだきても謝すべし」而して今日津々浦々の報恩講にこの讃文を以て聖人を讃歎し奉るも、まことにゆえありと謂つべきである。

この如く如来大悲の恩徳を感謝する心は、そのまま師主知識を感謝する心となるのである。何となれば師主知識の言葉そのままが、如来の本願そのものであるからである。是が即ち「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまらすべし」と、よきひとの仰せをかふぶりて、信するほかに別の子細なきなり」という聖人の絶対信仰である。

「智慧光の力より、本師源空あらはれて、浄土真宗をひらきつつ、選択本願のべたまふ」法然上人の選択本願念仏である。昔風の信者は親鸞聖人は権化なれば、その必要はなけれども、我等を導かんがために、在家止住の宗風を開き給うと云うものがある。如来にも芝居がかりの言葉にして、何等の潤いもない律法的化石したる嫌いあれど、その真意を味えば、機の深信、罪惡観を我身に引受けて、如来大悲の大法と共に師主知識を深信したる、絶対信順の態度と謂つべきである。是れ絶対信仰より生じ来る師弟秩序の精神である。

如上の罪惡観、機の深信より自然に生じ来る慚愧懺悔の態度は、実に美わしき信順の態度である、自発的秩序である。歎異抄に「自然のことはりにあひかなはば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなり」といい「わろからんにつけても、いよ／＼願力を仰ぎまゐらせば、自然のことはりにて柔和忍辱の心もいでくべし。すべて往生には賢き思ひを具せずして、ただほればれと弥陀の御恩の深重なることを、つねに思ひいだしまゐらすべし、然れば念仏もまふされ候、これ自然なり、わがからはざるを、自然とまふすなり、これすなはち他力にてまします」とある。これ絶対の信仰より建現する人生の態度である。

この人生における絶対の態度は、畢竟機の深信、罪惡観より起り来るのである。されば前記の聖人の御自督を我身の上に戴きたる言葉に「まことに如来の御恩ということ

の教化は、親鸞が如きいずれの行も及びがたき、地獄は一定すみかかもの助けんとて、選択撰取したまえる専修念仏の一道である。

生死大海に沈淪して溺れつつある親鸞に対して、法然上人は如来大悲の船筏を浮かべて、招喚したまうのである。

「源空があらんとくころへゆかんとおもはるべし」と、生死運命を同じうして導き給う船頭である。その船が覆がえらんとも、何れの浦に着かんとも、運命を同じうして、乗托するばかりである。これが真の知識に信順する態度である。

この如く法然上人は御教化によって選択本願念仏を絶対の信順したまう態度が、聖人の常の御述懐である。曰く、「弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」という絶対信順と共に、絶対の罪惡観である。

この聖人の御自督そのままが、吾等がためには亦如来の代官として導き給う招喚の声である。歎異抄に「さればかたじけなくも、わが御身にひきかけて、我等が罪惡の深きほどをも知らず、如来の御恩の高きほどをも知らずして、迷へるを思ひしらせんがために候ひけり」とある。

この如く信仰はいつも我身は罪惡深重、地獄必定の凡夫として、師主知識はこの如来大悲の代官其者となるのである。ば沙汰なくして、われも、ひと、よしあしといふことをのみつねに申し合へり。聖人の仰せには、善惡の二つ総じてもて在知せざるなりと云々」と廻心懺悔してある。全体人生に於て善惡是非の争いをなすということは、如来大悲の御恩を知らざるからである。如来の無限大悲の御慈悲に対してみれば、善惡是非の相対的区別は、みなもつてそれごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますと謂つべきである。かく四海兄弟、同一念仏の平和信順の人生を建現し来るのである。

此の如く親鸞聖人の同朋観念は、同一鹹味の大信海の絶対信に根拠がある。宗教の救済に於て男女老少の区別なく、貧富道俗の差別を論ぜざるは当然のこととして、造罪の多少を問わず、修行の久近を論ぜずといえは、既に自力の効力を認めざることになる。大願清浄の報土には品位階次を云わず一念須臾の頃に速疾に無上正真道を超証すと言われた。絶対の信仰には三輩九品の別がないのである。然れども猶進んで智愚の毒を滅するとか、善惡の二つ総じてもて存知せざるなり、というに至りては、如何にも四海兄弟の観念を徹底したるものである。

殊に善惡を簡はずといふことは、人生問題の上に於て、大なる影響を及ぼす事である。人間は何人も自己を以て善となし、他を惡と見なしやすいものである。茲に於て、是

非善悪の斗争を生ずるのである。而もその考は各々別なれば、畢竟相対的に各自の善悪観を有するのである。聖徳太子が「人皆心あり、心各執るところあり、彼是なるときは、我非なり、我是なるときは彼非なり。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是凡夫のみ」と仰せられたは、親鸞聖人の所謂一切善悪凡夫人、とあるに全く符合する。

歎異抄に「如来のおんころよしと思召すほどに知りとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしと思召すほどに知りとほしたらばこそ、あしきを知りたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫火宅無常の世界は、よろずの事みなもて、そらごと、たわごと、まことあることなき」人生たることを見究むる時は、最早如何なる善を以ても進む能わず、悪を以て退く能わず、寧ろ此の如き虚仮不実の我等たることを憐愍して、飽くまで見捨て給わぬ大慈大悲の選択本願の親心より他はない。これを「ただ念仏のみぞまことにておはします」と仰せられた。実に聖徳太子の「世間虚仮、唯仏是真」という御遺言に揆を一にするものである。

此に於て人生篤敬三宝の光明燦然として輝き来るのである。無明の大夜、無碍光の灯炬に照らさるるところとなるのである。かくて室内に於ては天井と床と上下の秩序明かとなり、左右前後、横の人生も衝突せぬようになるのである。

九十を越えて

昭和五十四年

新年の二日の今日は誕生日八十七と我なりしなり

困君逝く

わが困残る片目も見えずなり妻子の顔もわかず逝きしか

今はただ柩の前にぬかづきてみ名称ふのみ君よ安かれ

已閉ぢ我とわが身をひと塊となして籠るか自我といふもの

八十八の老がつくれるみじか歌清らに瘦せて鶴としもなれ

八十八めでたきものいひなしてこの一件を片つけなむか

ここに於て聖徳太子の「上和らぎ、下睦みて、共に事を論ずるに諧うときは、事理自ら通じて何事かならざらん」という人生平和の理想を建現するのである。これ同朋観念と秩序精神の大調和である。

源信僧都の御歌

我だにもまづ極楽に生まれなば 知るも知らぬも皆迎へてん

よもすがら仏の道をもとむれば 我が心にぞたづねいりぬる

同じこと一味の雨の降りぬれば 草木も人も仏とぞなる

一時に注ぎし雨の潤ひつつ 三草二木の枝さしてけり

朝顔のあだにはかなき命をば つとめてのみぞしばしたもたん

夏ごろもひとへに西をおもふかな うらなく弥陀をたのむ身なれば

法華を花葉の喩品を
大中小三草

柳瀬留治

人はいさあるじ己れにめでたさの湧きこぬこれやわが癖とせむ

凡そ世はめでたからざれ衆がなすをまねて同じて飲めめでたさよ

死に臨む覚悟なきまま念仏に任せまつりてなすべきをせむ

老い至り死になむ時し世の凡てむなく消えぬ念仏のあり

生きのまにまに洩るる念仏嬉しきの極まりに洩れ悲しきに洩る

とどこほる心の溝の底砂を流す清水ぞわが念仏は

念仏と歌と酒とが我が胸に渾然と一に融くる嬉しさ

音絶えて独りびとりが消えてゆくこの世淋しも南無阿

弥陀仏

妻が植えし紅梅の咲きわが植えし白梅咲きてのどかなり今日

一年生になるを嬉しみ児らは去り園長我のいよいよ淋し

八十九となりてひしひし死を思ふ友はらからも死して世になし

老いぬれば生きのほかなし耀かに見えし世事さへ何ぞむなしき

さめざめと念仏しつつ我はあり恐しき死のさもあらばあれ

右に走り左に走るこの蟹やいづれを前としようしろとな

一道会の記(一)

次ぎに西元先生が司会者としてお話がありました、次のようであります。

誠に有難うございました。先きに申し上げましたように、井上先生、山田先生、最後に稲津先生のお話を承ることができるのでありますが、そうしますと、私、一言申し上げたいことが言えなくなる恐がありますので。

この間、はからずも龍谷大学の報恩講に参らせていただいたのですが、現在の学長は千葉乗隆先生であります。その学長が私についての紹介のお言葉に、こういう風に言われました。自分は父と親しかつた京都の浄住寺の神原先生のお寺に三ヶ年間置いていただいたと申されました。そして時々怠け心が起つて学校へ行かない時があると、徳草先生が、千葉君とも角学校へ行きなさい、と仰言つて、ナムアングアツと申された。人生一番大事なお念仏を、この禪宗のお寺の浄住寺でいただいたこと、この事が印象深いので

せる

前方に何ぞ吉事よことのある心地し前にのみ歩む我も犬も猫も

逝きにける人を悲み念仏す後世なしとせば遣り処ならむ

有難きこの念仏のみ心を知らざる人よあはれいとしも

来世へと心せかるる夜の目覚まだ娑婆にゐる我に気がつく

遂ひの日を思ふ儂さ払ひのけ勤に行くと杖つきて出づ

しばかれし先生のみ声耳にありて折にふれては聞えてぞ来る

先生は正にみ仏わが業苦とりて負はずに安けくぞ老ゆ

我が闇の晴れしさやけさ難むづかみたる生きのたつきの何と軽しや

神原徳草

この機会に申し上げたいと存じます。千葉さんも今日お参りしたいが、学長の職にあるので行けないと思うが、浄住寺様に呉々も宜敷くと、こう言つて居られたことを思い出し一言申上げておきます。今日は龍谷大学、大谷大学の学生さんが数名居られますので申し上げます。

今お話下さつた川畑先生は京都大学名誉教授、実は私は五十余年前、入学した時からの仲間でありまして、京都に居りまして殆んど一日も別であつたことがない、極端なようです。そういうことがあります。入学以来卒業まで、冗貴であります。そういうことを申上げて、次ぎは神かみ戸と大学々長であります。井上先生のお話を承ります。

次で井上先生のお話は次のようであります。

西元先生はもつと話されないといけないのですが、ああ言われますので仕方なく話させて頂きます。今年、昭和五十八年でございますので、白井先生が四十八年にお亡くな

りになりまして丁度満十年の秋を迎えました。かつてこんなことを仰言ったことを思い出しますが、人間というのは外から見ると身体、内から見ると心、その心を見ずに身体を見るから世の中がゆがんでいる、とこんなことを人間というものを語り尽されて居られました。そういう思出を申し上げます。

私共御縁と申す外仕方がありませんが、私はあまりしばしばではありませんでしたが、学生の頃に池山先生のお話を芦屋でお聞きしたのでございます。こちらの御住職も禪の中でお念仏して居られる。名古屋に西川さんという方、これまた禪のお坊さんで、その西川さんの最近私お聞きしました歌に「ながながの月日をかけて弥陀仏は、そのおころを届けたまえり」の一首を聞きましたのですが、禪の道に居りながら遂にお念仏に帰着されたお心が、何かこの一句の内に沁々現われている感じがいたします。「ながながの月日をかけて弥陀仏は、そのおころを届けたまえり」何やかや思い出すことしか申せませんが、私は今まで親鸞聖人の御著述を長い間拝読して居りまして、何かこう素通りしていたと感じましたことは、例えば信巻には、信心のことを「真如一実の信海」とあり、ここに真如一実と容易ならぬお言葉があります。然し今迄に何度もそういうお言葉を拝読しながら、何かその真如一実というおころに

取不捨の故に正定聚に住す」という、そして「弥勒に同じ」とも仰言る。且つまた「如来に等し」とも仰言る。ああいう高らかなお言葉の裏に、聖人と教の広大さと申しますか、深広と申しますか、そういう所を私共はしっかりと味わせていただいで、先程川畑先生のお話にもございましたが、外へもって動き出す生活と、内に向って深まってゆく仏教的な世界、その違いというものを気付かせていただくのであります。そういう所から先程のお話にも出ましたが、池山先生が非常に寂（しずけさ）という、そういうものをお持ちになつて居られたという。白井先生の上にもまた寂けさ、というものが私に心打たれたものでございます。これは性来の御人格というものもございましょうが、その命の住むところというものから、自然と出て来る一つの風格でないかと思ひます。

この間、芦屋の仏教会館がございしますが、そこで坐談会を致しました時に、或る一人の方から、仏教は、特に親鸞聖人の教は興奮の無い宗教だと、こんな言葉が出たんです。私にこれで心に残りましたんですが、興奮が無いという、裏を返せば、寂けさということ、その寂けさの中に、無限の世界に通わせていただく、そういう光りを私共は気付かせていただく、そういうことになって来ると思ひますが、今日神戸あたり、京都でもそうかも知れませんが、親鸞

深く眼をそそぐことなしに過ぎて参つた気がいたします。そう思つてまいりますと行巻に真如一実という言葉が随所に出ておりますことを新らしくと申しては何ですが、気付かせてまいるのであります。「形なきところから形をあらわして」、親鸞聖人のお言葉に随ひますと、「一如法界より形を顕はして、無碍の誓をたねとして阿弥陀仏となり給ふ」、或は「形なき大いなる世界から、御名を示して衆生に知らしめ給ふ、即ち阿弥陀仏なり」という語がございします。仏教というものの如何なる教であるかということが、超越的な実在の人格神という、そういう所に基づいて、その神の御心に随うという、そういう西洋の人格神と仏教の宗教性というものととの根本的な違いが、只今申すようなお言葉の中に感じられてまいるのであります。例えば、文類聚鈔の中に「必ず無上淨信の暁にいたれば、三有生の雲晴れて、清淨無碍の光耀ほがらかにして、一如法界の真身顕はる」。これを色々と真宗の学問では現益とか当益とか、そういうように分けて理解される場合が多いのであります。然し、二つに分けることも大切でございますが、現益と当益というものは、いかがでしょうか、底は一つにつながつておる、そういうのでございませぬでしょうか。親鸞聖人のおころを伺つてまいります時に、その辺に一つ心をとどめさせていただきまして、そして正定聚という「撰

会という集いが仲々堂々と開かれています。私は直接まいつたことはありませんが、行かれた人の話を聞きますと、非常に若い人々が感動の眼を輝かせて集つて居られるということなんですが、然し感動ということが、や、もすると興奮とか、または陶醉ちゆうざいというようなところにすべり込んでゆくようなことが無からうか。若い者は誰にも非常に感情的でありますから、人々を集め引つ張つてゆくには感情的に盛りたてて行くことは、如何にも一つの方法かも知れませぬ。然しそれがどういう所へ行き着くか。あの歎異抄九章の「勇躍歡喜のころおろそかに候こと、また浄土にいそぎまゐりたきころの候はぬは、いかに候べきことにて候やらん」という、ああいう唯円大徳の言葉に、聖人のお言葉の中には、極めて静かなものがある感じがします。白井先生の御歌に「弥陀仏のお誓ゆえにあめつちのおのづかなる寂けさに入る」とありますが、私には忘れられないお歌でございます。「おのづかなる寂けさに入る」そこに仏教的真実の広大無辺の輝きに気付かせて頂きます。今日は思いつくままを申し上げます、池山先生にお会いする奥にあるものを、聖人の御心に立ち直つて味わさせて頂きますと、寂滅の光り、そこに「真如一実」と仰言つたそう云う世界から私共にお呼びかけて下さる招喚のお声を先生方から承つている事を味わせて頂きました。

「念仏詩抄」より

木村無相

ワケわからうとせず

香師おおせに

香師—香樹院徳龍師

聞けばワケはわかるが
さてきて晴れにくいものは
わがウタガイなり”

そのウタガイ

晴らそう晴らそうとせずに
ただ六字のオイワレを聞け
ワケわからうわからうとせずに

ただ聞けただ聞け

ただ聞きに聞けと—

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

今度の一大事の後生

香師おおせに

今度の一大事の後生

オノが善悪のハカライすてて
ただ阿弥陀仏に助けられて
往生するぞと信じたてまつり
念仏申すよりほかなきなり—”

ただ

アミダ仏に助けられまいらせて
ただただ

アミダ仏に助けられまいらせて

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

その迷い離れさそうとて

今よびたまう

香師おおせに

ウタガイはれざるわけに三—

一 真実大事のおもいより聞かぬゆえ
二 わが心の善悪のみにかかわるゆえ
三 如実真実のまことを知らざるゆえ”

その者をあわれみたま
その者をかなしみたま
今よびたまう

ナムアミダブツと—

又よびたまう

ナムアミダブツと—

その三界の迷い離れさそうとて
五劫のご思惟 永劫の御修業
お念仏のご成就—

ナムアミダブツ ナムアミダブツ
ナムアミダブツ ナムアミダブツ

木村無相『法談』

昭・五十八年十月二十三日（日曜）（福井新聞掲載）

人生 生きて七十年

わたしをまもってくれた

カラダよ——

あなたのおかげで

生きられた

わたしわたしという

このわたしが

あなたのおかげで

生きられた

真夜中に

ハラを撫でつつ

かくおもう

れでここ（和上苑）に入れていただいたのです。丁度もう十年になります」

——毎日、どのような日々を送っているのですか。「体が弱ってきたので、特別の用事がない限りベットで寝ています。東京の或出版社から、念仏詩抄の続編を、私の信仰生活の歩みを出版したいので、原稿を書いてほしいと三年前から頼まれているが、とても書ける状態でないのです。そのままになっています」

——特別な用件というのはどういうことですか。

「神奈川県や三重県、京都、石川県などから毎月四、五人の人が訪ねてくれるのです。信仰関係で知り合った方々ばかりです。法談をしにこられるのです。だから、私は妻子は勿論、親、兄弟もない身ですが、少しも淋しいことはありません。この前の十六日にも京大の梶山教授（仏教学）が来て下さいました」

——信仰心のお蔭で人が集まって来るのですか。木村さんは、なぜそんなに信仰心が厚くなったのですか。生い立ちと関係があるのでしょうか。

「父は土建の親方、母はバクチ打ちで、いつも喧嘩ばかりしていました。荒っぽい喧嘩で、ツルハシや出刃包丁を持って「殺してやる」とやり合うのです。家には若い職人が三十人ぐらい居て、金があると父と一緒に飲む、打つ、買

この詩は、武生市瓜生町の特別養護老人ホーム「和上苑」にいる木村無相さん（七十九）。木村さんは、人間の生きる道求めて遍歴を続けた天涯孤独の宗教詩人。十年前三百三十編の詩を『念仏詩抄』で出版。縁あって武生に住み、信心をさらに深めて残る日々を大切に過している。

木村さんを訪ね、遍歴の人生と宗教のかかわりなどを聞いた。念仏詩抄の中から詩を紹介して三回にわたってお届けする。

——木村さんはもともとどちらの生まれですか。

「あちこち転々としたからね……。強いて言えば、熊本県です。父が土方の親分をしていたので、八代市の飯場で生まれました」

——武生へはなぜ？

「池田町のお寺さんで世話して下さる人がいましたね。そ

うの生活。無ければ借金取りに追い廻され、子供の私らが言い訳をさせられる毎日でした。子供は私と姉三人でしたが、正月はいつもお粥をすすってような生活でした。

そんな調子で各地を転々としてきました。国内はもとより、朝鮮や満州各地を渡り歩いた。小学校だけでも七つかわったほどです。だから子供心に「落ちつきたい」と思っていました。友達もできないから本ばかり読んでいた。温かい家庭が欲しいと思いました。転校するたびに近くの教会に行つたものです。宗教心があつたわけではない。神父さんが可愛がってくれるからです。

こんな生活だったからいつも父や母を恨んでいました。世間も冷たかった。生きていくのがいやだったから十五歳ぐらいの時には「どうせ死ぬんなら父と母と薄情な世間の奴ら五、六人を殺してから死んでやる」と考えました」

——生きてるのがつらかつたんですね。

「ええ自殺未遂も二度しました。倉田百三の『出家とその弟子』も読みました。感激しましたね、早速歎異抄も買いました。自分が救われるかもしれないと思つたのです」

——そういうことで自然と心が宗教に向つたのですか。

「そうですね。忘れもしません。大正十三年十一月三十日の夜、丁度二十歳の時でした。それまで「親が悪い、世間が悪い」と、外へばかり向いていた目が、突然、自分

の内に向いたのです。理論じゃないんです。本当にフト：という感じなんです。宗教とはそういうものなんですね。そしたら、びっくりしました。あまりにもきたなく、あさましい自分だったからです。ウソはつく、そねむ、腹を立てる。父や母をも殺そうと思っている。ひどい根性を持つてるもんだ」と自分ながらにききました。心は暗闇なのです。そして思いました。『煩惱を断じて悟りを開きたい』と。それから私の宗教遍歴が始まりました。真言宗に学び、それで救われずに浄土真宗に移り、それでも満足できずに真言宗へ戻る。それを二回繰り返しました」

昭・五十八年十月三十日(日曜)(福井新聞所載)

——煩惱を断つために木村さんは、どうなさったのですか。

「すさんだうえに無宗教の家庭で育ったから、どこに手がかりを求めればよいのかわからなかった。とりあえず四国遍路に出ました。それは昭和八年の夏でした。そこで愛媛県の香園寺の院家が高僧だということを聞いて、そのお寺に行ったのです。三年間住みこんで、真言宗を学びました。八十八カ所の六十一番目の札所でしたから、巡礼者の世話もしました。すると、お金や着物をくれたりする、それだ

からまた世話もしました。

しかし私にはそれが問題だったのです。もと／＼煩惱を断じたくてこの寺へ来たんですから。だから何もくれなくても喜んでお世話ができる自分になりたいと思い、丁度その寺にライ患者や乞食の住んでいる建物があったので、この世話を始めたんです。しかし、顔では笑って食事を作つてあげたりできるが、心の中では『きたない、臭い、こんな病人が』と思っている。こんな自分がいやで、とても煩惱を超えられなかった。『自分では出来そうもない。阿弥陀さんに助けてもらわなければどうにもならん』と思つて、三年後にその寺を出たのです」

——自力では難しいから、他力を求めたのですね。それで浄土真宗の寺へ？

「そうです、徳島のお寺に四年間いました。ありがたいご院主さんでした。しかし、私にはどうしても煩惱を除く糸口が見出せなかった。『やっぱり私は駄目なんだ。求道とか聞法はやめよう』と決心して宗教界から足を洗い、一年間、静岡で働きました。しかし、矢張り仏法を離れられず、真言宗と真宗、いわゆる自力と他力の間を行きつ戻りつしたのです。』

——真摯な求道生活だったのですね。なぜそんなに迷ったのですか。そして得た結論は？

「昭和八年に四国遍路へ出てから二十五年間が迷いでした。三十三年に浄土真宗に落ち着き、聴き出してから二十五年。丁度半々になりました。今から思うと徹底しなかったから、また別の方へ行ったりしたんです。悟ったと思つても一時の感激だけで、本当の悟りではなかった。『ちょこちょこ信心数知れず』というのが、本当にその通りだったんです。結論は？というところ、私が私である限り千年生きてても万年生きてても煩惱を消すことは出来ない』とわかったのです。だから、煩惱の身のままお念仏を喜びただいて、一生を過ごさせていただこうと思ひ至ったのです。『煩惱を断ぜずして涅槃を得る』ということです。そういうことで浄土真宗に帰さざるを得なかったのです。宗教はいろいろあるが、自分自身が落ちつけなければつまらんからね」

——種田山頭火に出会ったのは、浄土真宗に落ちついてからですか。

「いやいや、迷ってる最中の昭和十四年十月でした。六年間は文通してもらった末に、お会い出来たのです。私は三十五歳、山頭火さんは五十八歳。四国遍路の途中に訪ねてきてくれたのです。六泊七日間、一緒に暮らしました。山頭火さんは私に『流浪はいけない。流浪はやめなさい。流浪はもう私一人でたくさんだ。私をもって最後としたい。あんたはまだ若いのだから』と云ってくれました」

——それでも木村さんの遍歴は終らなかつたんです。

「ええ、妻帯したこともありませんが、自分の煩惱を解決することに精いっぱい、とても妻を食べさせるために仕事をしていたらなかつたからです。でも後悔はしていません。それはそれでよかつたと思っています。できればこの和上苑で死なして貰いたいと思っています。きのうのことは済んでしまつた、あすのことはわかりません。今日が大切なのです。人生は今がありがたい、今、幸せを感じなければつまりません。」

私が迷つて迷つて苦労したから、同じ所で迷っている人がいたら助言してあげたいと思います。一生苦しまねばあかんののは気の毒やでね。命のある限り、ご縁のある人とは話をしたいと思つています。」

——どういふおひとが

となえても

——どういふきもちで

となえても

ナムアマダブツは

おやのみ名——

ナムアマダブツは

によらいさま——

自力も他力も
ありわせぬ
ナムアミダブツ

「自力も他力も」(詩抄七十八頁)

昭・五十九年一月十五日(日曜)(福井新聞所載)

木村 無相 氏の 死

昨年十月の「日曜清談」に登場して貰った木村さんは、一月六日に武生の林病院で七十九歳で亡くなられた。無相さんは煩惱を断じようと仏教を求め、煩惱のまま助けられる道に目覚めた宗教詩人。全国的にも知られた人だった。九州に生まれて、全国各地を放浪して歩いた無相さんを福井に招いたのは池田町水海の浄土真宗誠照寺派、誠徳寺の加茂淳光住職(五〇歳)。無相さんの事を加茂住職に、木村さんとの出会い、思い出などを振り返って貰った。

○ 無相さんは真剣な求道者でした。もつと生きて導いてほしいと思つた人も多かつたのじゃないかと思ひます。住職さんも残念だつたでしょうね。

「まだ無相さんが死んだなんて信じられないのです。私は容態がかわつたと聞いて一月三日の日に駆けつけたんですが、それが無相さんとの最後になりました。無相さんはペンと紙をくれと言つて、

「生き死にの 道は ただ ただ ナムアミダ
ただ称えよの仰せばかりぞ ナムアミダブツ」

と臨終の歌をやつと書き「疲れた」と言つて眠つたんです。それ以来、意識は戻らなかつたそうです。無相さんは四、五年前に自分の葬式をしています。死亡通知書も作つてあつて、死ぬと同時に、老人ホームの職員の方が有縁の人に出したんです。遺体は福井大学に献体するようにしてあつたんですよ。それに新聞代や牛乳代も六月分までまとめて払つてあつたんです」

○ かなり前から死への準備があつたんですね。「そうですね。浄土真宗には往生が二回あります。一つは「心の往生」で、平生のうちに如来の本願をいただいた時です。もう一つは「体の往生」いわゆる「体の葬式」ですね。命が終つた時です

無相さんは心の葬式はもちろんですが、生きてる間に体の葬式も済ませてしまつたんですね。私達に迷惑がからぬようにと思つたんでしょう。無相さんはよく言つていま

した。「普通の人は奥さんや子供が、
ルぬ時でも後のことが心配になって心残りがする。しかし私は一人者だから、何も心配することがない。幸せだ」と。後始末まできちんとして死んでいったんですね」

○ 天涯孤独で放浪を続けた無相さんと、住職はどのようにして知り合つたのですか。

「私はお寺の生まれで大学でも仏教を学んだのに、お念仏が本当に私のものになつていなくなつたんです。それなのに、お念仏を喜んでるようにお説教をしなければいけない。ここに私の心の苦しみがあつたんです。四十七年秋ごろでした。ある宗教誌にこんな詩が載つたんです。

「信者になつたら

おしまいだ

信者になれぬそのまま

ナムマイダ ナンマイダ

ナムマンダブツ

ナムマンダブツ

私はお念仏の信者になれぬから苦しんでいたのに、「信者になつたらおしまいだ」という詩に出会つてびびくりしたんです。「これだ」と思ひましてね。その詩の作者が、無相さんだつたんです。すぐ無相さんが勤めていた東本願寺同朋会館の門衛所に訪ねて行つたんです。

それから無相さんとの交際が始まりました。二人が尊敬する先生が同じだったこともあつて、無相さんが私の寺へきたりして一緒に勉強させて貰つたんです」

○ 出会いはわかりましたが、無相さんが福井へ来たのはなぜですか。

「四十八年の夏に無相さんから「私も七十歳になつた。どこか落ち着く所がほしい」という手紙をもらつたんです。無相さんは、あちこちの知人に同じような手紙を出して、いろいろ見て廻つた結果、私が推薦した武生の和上苑が一番気に入つたそうです」

○ なるほど、そういういきさつだつたんですか。私が以前に取材した時、無相さんは「初めて武生の駅に降り立つた時、道行く人たちに、とてもお念仏をありがたがる雰囲気を感じられて、いい土地だなあ、と思つた」と話していました。それで福井へ来たんですね。

「私は福井刑務所で教誨師もしていますが、そういう宗教的雰囲気は受刑者の人たちも言っていますね。福井には温かみがある」つて」

○ 住職にとって無相さんはどんな人だつたと思いますか？

「私のために苦勞してこの世に出てきて下さつたお方という気がします。他人に話すことによつてだんだん自分の

信心がはつきりしてくる」と言つて、よく私の問いに答えてくれました。手紙も段ボールいっぱいもらっています。無相さんはよく言っていました。お念仏を称えよというのが如来の頼みなんだ」と。私も信者になれぬまま念仏を唱え続けたいと思います」

——そうですね。それともう一つ、私は取材者の立場から言わせていただきますが、無相さんは何度も「今のお坊さんは駄目だ。真の念仏者は在家の中にしかない」と歎いていました。宗教界が真剣にこのことに耳を傾ければ、無相さんも喜ぶでしょうね。ありがとうございます。



木村 師 から聞き書き 土井 紀明

生き死にの 道は ただ ただ
ナムアマミダ
ただ称えよの 仰せばかりぞ
ナムアマミダブツ

昭和五十八年十二月三十日にお伺いした時に自分で書いて下さいました、そして「苦しい状態では、念仏を申すこともできぬが、称えられなくても、称えよの仰せばかりで沢山。称える、称えんでなく、称えよの仰せがかかっているのが、念仏の行者」と仰言いました。

その他苦しい息の中からいろ／＼ご教示下さいました。「もう何も思い残すことはない」と何度も云われ、囲りの人達に「ありがとうございます」と感謝しておられました。そして死に対して少しの不安や心配はしてられないご様子でありましたが、ただ楽に死ねたらなあ、と云われました。

昭・五十九年一月十二日、合掌。

慈光日誌抄

念仏申して立ち上がる

お蔭で、全くお蔭さまで、親鸞聖人の主著「教行信証」を、さいきん漸く、いくらか拝読できるようになりました。わたしが初めて教行信証（御本典又は御本書と略称する）を繙いたのは、兵隊に召集されて台湾の台南に赴いた昭和七年の初夏でありました。あの亜熱帯の台南の陸軍病院の病舎で、御本典を通読した想い出は忘れ難い。しかし当時の私には、まことに猫に小判でありました。

その御本典に、時機熟して、漸く昨今、親しむことが出来るようになりました。それは一に、今は亡き息子の尊きお蔭というほかはない。

しかし教行信証について、現在のところ、まだ語る力量を持ちあわせてはいない。しかし、そうはいえ、御本典を通じて最近、痛切に我が身にひびいてくるものがある。そ

西元宗助

これは、「念仏申せよ」ということ、「念仏申して立ち上られ」という如来招喚の声である。

すなわち、弥陀のご本願を仰いでは「助けんとおぼしめし立ちける本願のかたじけなさよ」（歎異抄・後序・親鸞聖人）と、念仏申し立ちあがる。そして、その喜びが深ければ深いほどに「そくばくの業をもちける身にありけるを」と、慚愧の念からしてさらに立ち上がらせていただく。

しかし、かくは申せ、その慚愧、その感謝も、本当は我がものではない。妙好人才市が

ざんき歡喜ももらいもの
南無阿弥陀仏につけてある
慚愧くわんぎで ありますよ

と、いみじくも詠つてあるように、そして又、わが無相さんの口ぐせでおありだったように、ただ、ただ、ナムアミダブツ。しかし、そのお念仏には、深い深い如来の大菩提心が、おのずから蔵められている。だから私は、念仏申して立ち上がらせていただく。

もとより『教行信証』の深奥なる旨趣は、わたし如きものの語ることの出来るものではない。しかし聖人が、その信巻に、「本願力廻向の信心」とは、要するに大菩提心であると、すなわち如来の大菩提心を、わが身にたまわることであると、非常な感銘をもってお述べになつていられることに、私は深く感動させられている。そしてこのことが多分、教行信証をご製作になつた聖人の一つの眼目でおありになつたのではあるまいか。即ち、法然上人ご撰述の「選択本願念仏集」に深く感応されて、しかし本師法然の仰せになれんとして十分に果たされえなかつたところを、殊に在家止住の凡夫の立場から応答されて、悪人正機の本願の旨趣を開顕されたのが「教行信証」ではないかと思われる。

そしてそのためにこそ、聖人は、信心の純潔性を特に重大視し強調されて、三願転入を辨証されたのではないかと。けれど第十九願乃至第二十願の懈慢界―自己満足―の信心では、人間の自力なる故に、罪業深重の凡夫は真に救われ

三月三日、桃の節句の日、雪の降る朝。



ることが出来ないだけでなく、他力の「大菩提心」を、わが身にたまわることが出来ないから。ともあれ、御本典について拝読するところを述べようとして、多少術学的になつたかと思われる。しかしそれを、われらの生活語でいえば、さきにも述べたように、念仏申して立ち上がる、と、私はいただく。

尤も、そうは申せ、わたしが立ち上がるのではない。本願力に催されて、やむにやまれぬ心をたまわるということ。それは歎異抄における聖人のお言葉で申せば、「浄土の慈悲といふは、念仏していそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもつて思ふが如く衆生を利益するをいふべきなり」という、あの「念仏していそぎ仏になりて」の「いそぎ」ということであつて、このやるせないお言葉に、おのずからなる他力の「大菩提心」、他力の「大慈大悲」が看取され仰がれるではないか。

そういえば、聖人は御本典において、如来の本願力を讃えて、二度も、浄土論註の「譬へば阿修羅の琴の、鼓する者なし」と雖も、音曲自然なるが如し」を引用になつていられることが感銘深い。そしてその「阿修羅の琴」を、無相さんは、これを正しく如来大悲の念仏と、われらに教えて「浄土に還つていかれたのであります。このように「阿修羅の琴」を教へていただくこと、もはや、「立ち上がる」と

明日は、明日こそは

ツルゲネーフ

暮れ行く一日一日の 何と空しく味気なく、甲斐ないものに見えることぞ。その残す跡形の何と乏しく、その一刻、一刻の何と愚かしく無意味に流れ過ぎたことぞ。

でもなお、人は生きたいと望む。生を重んじ、希望を生に、己れに、未来に繋ぐ。

ああ、人は、どんな幸を未来に俟つのであるか。一体なぜ人間は来るべき日々、今しがた暮れたこの日に似ぬものの姿を、思ひ描こうとするのであるか。いや人間は、そんな事は思ひ描きもしないのだ。人はもともと思考を好まない。そしてこれは、賢明と言ふべきだ。

「明日は、明日こそは」と、人は己れを慰める。この「明日」が、彼を墓場に送り込むその日まで。

さて、一旦墓に横われば、洪々の思考もせず済む。

一八七九年五月

仏徳の讃仰

花田正夫

示現減度、拯濟無極

(大無量壽經)

「いのちあつてのもの種じや、死んで花実が咲くものか」と世間に生命を吹歌するが、仏は減度を現じ給うて一切の衆生を極りなく救済されるとある。

煩惱の満足にかりはてて昼夜に辛苦する私共には一寸解し難いことであつた。そこで法華經の如來壽命品を拜読すると、次の様な譬喩があつた。

譬えば良医の智慧すぐれて、明かに薬法に練達し善く衆病を治していた。その人が沢山の子供を持っていたが、父の留守中に他の毒薬を飲んで苦悶していた。父が帰って見ると、或は本心を失う者もあつたが、父の帰りを喜び、救療を願つた。父はこれを憐れんで好い薬草の色よく香りもよい美味なものを選んで服せしめた。すると子等の中で心を失っていない者は、この良薬を服し、病は悉く癒えたが、心を失っている者はこれを服しようとしなかつた。それと

段々と濃く鮮やかに心に映つて、年と共に気付き得なかつたことなどが次々と知らされてきた。この様に親は姿を消してから何時までも子供の心の中に生き続け、励ましや慰めとなつてくれるものである。

如來も常住不滅と聞くと、いつでも会える、いつでも聞けるとなつて、徒らに過し勝ちであるが、一度減度を示されると、はじめて驚いて遺教を深く味わうようになる。その実例として親鸞聖人を憶う。勿体なや祖師は紙衣の九十年と勾仏上人も渴仰せられたが、御在世中はその徳化を蒙つた者は尠なかつた。七百余年を経た今日、無数の人々が聖人をお慕い申している。これに反し、生存中は一世を震動した英雄豪傑も、鎌倉や武者どもが夢の跡、となつているのに鑑みる時、釈尊が肉身を滅し給うて、我々に大きな導きを頂いていることを思い、「減度を示現して拯濟すること極りなくまします」という世の鉄則を超えた如來の善巧の大悲を渴仰申している。

内は愚にして外は賢なり

(愚悉鈔)

「善悪の二字知りがほは おほそらごとのかたちなり」と、親鸞聖人は内愚外賢の御自身を慚愧せられている。俚言にも、みのるほど頭のさがる稲穂かなと云うが、聖人はそれとあべこべで、空虚の身故に、頭がさがらぬ奴で、

云うのを毒気が深く入つて喪心しているためであつた。

父はこれを悲愍して、方便をめぐらして告げた。「自分は老衰して死も近いのでこの良薬を今ここに留めておくからこれを服すように」と告げて他国に旅した。そして使の者を出して「汝の父はすでに死せり」と告げしめた。

この時子達は大いに憂惱して、父すでに無しと悲しみ、遂に心が醒めてこの薬を服すると病は皆癒えた。父はこれを知り、急いで帰り来つて子等に見せしめた、とある。

その結びに、我成仏よりこのかた、無量の時を経て來たが、衆生のために方便を示して減度すと説いた。これによつて良薬を服せしめたためであつて、肉身は滅しても、法身は不滅である、と説かれていた。

私はこれを読み、この世の親も在世中は、いつまでも居るものと思ひこんで、親の言うことも軽く聴き流し勝ちであるが、その親を亡くして後に、色々なことを気付くものである。私も父を亡くして五十余年を経たが、父の面影は

夢中夢を知らず、狂人が狂人の自覚がないのと同様である
と自照されている。

私自身は、孔子の「知らざるを知らずとなす、これ真に知るなり」の教や、聖書の「こころの貧しき者は幸なり、天国はその人のものなればなり」の言葉や、ソクラテスが、「我は何事も知らざることを知れり」の表白に驚いたが、いつもこれらと真反対で、頭のさがらぬ、知つたか振りをする身を持てあましていた時、この聖人の内は愚にして外は賢なりの仰せを聞いて、そこに底抜けの愚身に同座して下さる聖人の心にふれて、聖人のたどられる念仏の道ひとつに私の救いの光を仰がせていただいている。

世の中に立派な教は無数にあるが、よくなれない身は締め出されてしまふ、そこに、

「捨てられて身はなき者と思ひしにうれしや弥陀のひろひ子となる」

と云う古歌の道がひらけてきたのである。またそこに念仏の光照をうけて顧みると、地上のよき教は夫々に自分の姿を映し出して下さる鏡であると慚愧し且つは深謝させて頂き、念仏への裏面からのお勧めを喜んでゐる。

あとがき

新緑の四月となりました。花祭の行事が行われ、灌仏の賑やかさと、讃仏の歌声も懐しい思出であります。

本月号に近角先生の「真信の徹底による秩序精神の建現」を詳説して下さいました。私が京都の学生時代、勾仏上人の問題で近角先生の講話が華頂会館でありました時「闇い部屋に電灯がつくと、天井は上、床は下とハッキリ見えてくる。」と言われたのが今も耳底に残っています。

柳瀬様は近角常観・常音先生に直きに育てられた、今では数少ない方でありました。九十を越えられて歌集を出され又園長をしていられますが、障りの多いお身体とて、一日一日を大切に過していられます。

一道会の記は、木村無相さんの追悼号を出しましたので早くから原稿を頂きながらお

れて掲げさせていただきました。そこに井上先生が、白井先生の十年忌に当ることを知らせて下さいました。又先生が「形にとらえられて心を見落す」ことを常に仰言っていたとおききし、私共が物に眼をつけて、心を忘れていたことも省みさせられました。

木村さんの念仏詩抄をのせ、又福井新聞に日曜法談の出た記事を、加茂淳光師の御好意から転載しました。

西元先生の日誌抄に、御本典を読了された由、私は歎異抄をとおして、御本典は拾い読みしておるようは懈怠者で頭の下がるばかりであります。又私は、法然聖人の選択集も聖覚法印の唯信鈔をとおして拜読して横着を続けております。

八十の坂はやつと越えさせて頂きましたが、宿痾のため名大病院に通院しながら、其時々々の手当をうけております。月一度の一道会例会を第三日曜に開かせて貰っておりますが、これも病状によっては休ませて頂きます。の

こるは小冊子慈光の発行ばかりで皆様に接しさせてもらっておりません。今更にことばのありますことの有難さを身に感ずりますこととです。

四月十五日、例会はいたします。

定価 半年 八〇〇円(送 共)
一年 一六〇〇円(送 共)

編集・発行人 花田 正夫
電話 八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人 坂部 光雄
名古屋市南区駆上一丁目西三九

発行所

慈光社

振替口座 名古屋 六一四七〇番
郵便番号 四 五 七